

「度重なる梅雨末期の豪雨」

香川大学教育学部附属高松中学校 3年 山中 槇子 さん

梅雨末期の豪雨が今年も発生した。七月三日には、梅雨前線の影響で豪雨となった静岡県熱海市で大規模な土石流が発生し、多数の住民が犠牲となった。梅雨前線の停滞による大雨に加え、上昇気流を生む急峻な熱海の地形が雨雲を発達させたことが豪雨の原因とみられている。この時期の豪雨災害は五年連続である。

梅雨明けが近づくと、天気予報で「梅雨末期の大雨に警戒してください」としばしば耳にする。どうして梅雨末期に大雨が降るのだろうか。五月から六月ごろ、日本付近では南側にある太平洋高気圧と北側にあるオホーツク海高気圧が押し合っていて、これが梅雨前線となる。一方、六月から七月の初めごろまでは、お互いの高気圧同士がなかなか撤退せずに、梅雨前線が長い間日本付近に停滞する。そのため、日本付近では二ヶ月近くも曇りや雨の梅雨の時期が続くこととなる。梅雨末期は台風も発生しやすい時期であり、「梅雨前線+台風」というこれまでに大雨になったパターンもある。

自宅本棚にあった理科年表（国立天文台編）を手にとってみた。昭和三十年代以降に日本で梅雨時期の七月に発生した風水害で、死者・行方不明者が多かった事例を順に挙げると、昭和四十七年七月豪雨、昭和四十二年七月豪雨、昭和三十六年梅雨前線豪雨、昭和五十七年七月長崎大水害、そして平成三十年七月西日本豪雨災害がある。風水害というと台風のイメージが強いが、梅雨前線での被害が多いことが分かった。

近年では、線状降水帯という用語も耳にすることが多くなった。線状降水帯は、暖かな東シナ海から大量の水蒸気を取り込んだ雲が急激に発達し、梅雨前線に沿って積乱雲が線状につきつぎと発生することで、同じ場所で長時間激しい雨を降らせ、大規模な災害をもたらすことになる。

梅雨末期の大雨による土砂災害から身を守るためには、どうすればいいのだろうか。土砂災害から身を守るポイントとして、ハザードマップで自宅周辺のリスクを事前に把握したり、自治体が発令する避難情報を得たり、雨の降り方に注意し、いつもと違うと感じたら、災害の発生が迫っていると考えることなどがあげられる。やはり、正確な情報把握と、適切なタイミングで安全な場所への避難が重要であると言える。

この作文を書いている八月十三日に、広島県に「大雨特別警報」が発令された。また、「線状降水帯」による非常に激しい雨が同じ場所で降り続けているとして、「顕著な大雨に関する情報」も発表された。何らかの災害がすでに発生している可能性が高く、命の危険が迫っているため直ちに身の安全を確保しなければならない状況にあり、最大級の警戒をすべきと、地域住民に強く呼びかけた。

これほどまでに広島県で豪雨による災害発生の危険性が叫ばれているので、私が住む香川県高松市の災害危険度はどうなのか、香川県防災ウェブポータルサイトを見てみると、大雨注意報が発令されているが、避難情報はなかった。また、土砂災害の警戒レベルを確認すると、私の自宅周辺では土砂災害警戒判定で「非常に危険」と判定された箇所はなかった。この結果に、私はとても安心した。

私はこの安心の気持ちとともに、気象や避難情報をインターネットで得られることの重要性を痛感した。自宅にしながら、スマートフォンやパソコンを介して、正確な情報が把握でき、自分が今どのレベルの危険度の状況にあるのかを知ることができた。もし極めて危険な状況下にあると分かれば、すぐに避難を考えたいであろう。広報車や屋外マイクによって避難を呼びかけていた以前と比べて、格段に避難情報を確実に得られるようになった。

私はこの時、以前に配布された地区防災マップの存在を思い出した。本棚から地区防災マップを取り出して見てみると、豪雨時の土砂災害や河川氾濫範囲だけでなく、地震時のため池決壊氾濫範囲、さらには避難場所や避難ルート上の危険箇所も記されていることに改めて驚いた。これからは、インターネットなどを介した気象や避難情報とともに、地区防災マップに記載された情報も最大限に活用して、いざというときの身の安全の確保に努めようと思う。

梅雨末期の豪雨で、毎年のように災害が繰り返されている。梅雨前線の活動にともなう豪雨は、進路や大きさが予測できる台風と異なって、危険性を予測し備えることがとても難しいようである。「備えあれば憂いなし」という格言があるが、防災では私にこれに情報を加えて、「備えと情報が身を守る」であることを、今年の梅雨末期の豪雨と、今日の広島での豪雨発生で深く学ぶことができた。